

佐世保における過去の米軍に関わる景観

大 平 晃 久

Landscapes Related to Past U.S. Navy in Sasebo

OHIRA Teruhisa

I はじめに

現代の佐世保にあって、米軍の駐留、またその影響を、景観から読み取ることはたやすい。郊外の針尾住宅地区や赤崎貯油所などを目にする機会はあまりないかもしれないが、中心部のメインベースやニミッツパークなどはアメリカ海軍施設としていわずと知れた存在である。

また、米軍ゆかりの B 級グルメとして佐世保バーガーは大きな存在感をみせており¹⁾、ほかにはタコスも米軍由来という来歴が語られる²⁾。ジャズもまたアメリカ軍人の駐留をきっかけに佐世保に定着したとされ³⁾、佐世保を指して「ジャズのまち」といった呼び方さえみられる。これら米軍基地文化も、景観のなかにおいて米軍の影響を眼にできる要素である。こうした食や音楽を包含する、いわゆる「外国人バー（外人バー）」自体も、米軍基地文化としてとらえられよう。

このように、現在の佐世保において米軍が放つ存在感は大きい。山本⁴⁾は、第二次世界大戦後の佐世保で、米軍基地やそれに関わる景観とその表象がどう変化してきたか詳述している。現在でも、そして過去にあって佐世保における米軍の存在はもちろん大きい。しかし、本稿で問いたいのは、返還された米軍基地跡地など、過去の米軍に関わる景観は、現在の佐世保において存在感が薄いということである。基地跡地などの現地において、米軍にまつわる来歴は忌避されているといつてよい⁵⁾。

本稿では佐世保市中心部に対象地域を絞り、過去の米軍に関わる景観が現在はどう読み取れるか、またそれらが現地でどのように表象されているかみていく。さらに、現地で米軍にまつわる来歴がどのように忌避されているか、その要因は何か考察したい。

Ⅱ 米軍基地跡地とその周辺

佐世保市と隣接する西海市内の米軍基地の変遷について、図1と表1に示した⁶⁾。米軍から返還された基地跡地は佐世保市内にある程度存在することがわかる。ただし、海上自衛隊やSSK（佐世保重工業）の用地になっている部分が大半を占め、その意味ではあまり目立つもの

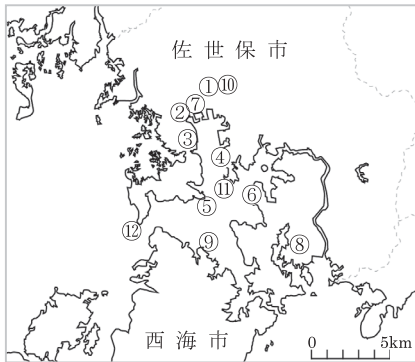


図1 佐世保市・西海市における返還地を含む米軍基地の位置
番号①～⑫は表1と共通。

ではない。一般人が立ち入ることのできる米軍基地跡地となると、佐世保市中心部の「佐世保海軍施設」（一部返還）と旧「なきりだに名切谷住宅地区」（全部返還）にほぼ限定されるといってよい（図2）。この2つの地区を中心に、過去の米軍に関わる景観を探りたい。

まず、佐世保海軍地区からみていく。佐世保海軍地区は大半が終戦まで日本海軍佐世保鎮守府施設の用地であり、海上自衛隊施設として早期に一部が返還された。さらに、1970年代に基地機能が縮小され、1976～80年には基地の正式名称も「佐世保弾

表1 佐世保市・西海市における返還地を含む米軍基地一覧

提供施設	現面積 (1万 m ²)	返還面積 (1万 m ²)	備考
①佐世保海軍施設	49.6	27.7	一部海上自衛隊と共同使用
②佐世保ドライドック地区	8.3	10.9	返還後 SSK, 一部 SSK と共同使用
③赤崎貯油所	75.4	17.7	返還後 SSK, 米軍人向け住宅地
④佐世保弾薬補給所	58.2		
⑤庵崎貯油所	22.7	2.9	
⑥針尾島弾薬集積所	129.7		
⑦立神港区	13.5	20.0	返還後 SSK, 海上自衛隊
⑧針尾住宅地区	35.4		
⑨横瀬貯油所	67.9		西海市
⑩名切谷住宅地区		19.0	
⑪崎辺地区		54.7	返還後海上自衛隊, 陸上自衛隊, 一部再提供
⑫向後崎艦船監視所		6.6	返還後海上自衛隊
(⑪) 崎辺海軍補助施設		12.9	再返還, 返還後海上自衛隊

佐世保市『令和5年版基地読本』佐世保市, 2023などをもとに作成。番号①～⑫は図1と共通。1968年以前に完全返還された施設は含めていない。「返還面積」は1952年8月以降の返還面積, ただし, 返還後の再提供などもあるので現面積と返還面積の和が1952年時点の面積というわけではない。

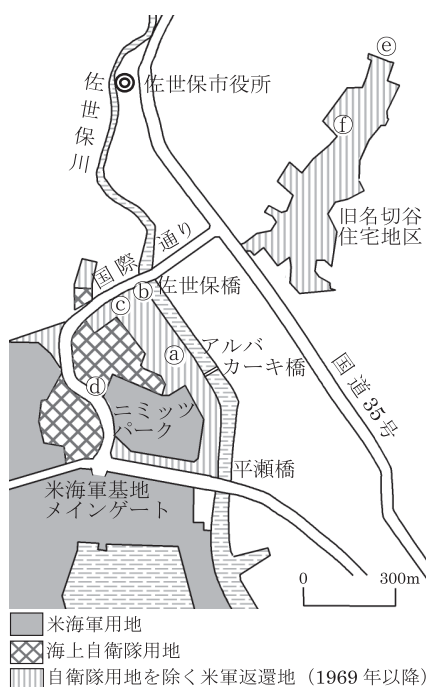


図2 佐世保中心部の米軍基地と返還地
ジョスコ線（鉄道引込線）の返還部分は示していない。①～⑥は本文参照。なおニミッツパークは一般人も立入可能である。



図3 米軍設置のモニュメント群
図2①。2022年撮影。

薬廠」に格下げされるという流れのなか、1978～82年に佐世保公園、佐世保総合医療センター（元市立総合病院）、中央消防署などの公共施設となる地区が返還されている（図2）。

このうち、1978年に返還された佐世保公園には、米海軍が設置したモニュメントが次の3基ないし4基ある（図2①、図3）。これらはきわめて明瞭な、過去の米軍由来の景観といえるものであ

る。一つは碑文に‘PRESENTED TO THE CITIZENS OF SASEBO, JAPAN IN APPRECIATION FOR TWENTY FIVE YEARS OF SUPPORT AND FRIENDSHIP’（25年間の支援と友好に感謝し 日本の佐世保市民に贈る）とある（1976年）。横には錨もあるがプレートなどはない。もう一つには、‘SASEBO FLEET ACTIVITIES COMMANDERS’（佐世保艦隊基地司令官）とあり、歴代の司令官の氏名と在任期間が1997年まで刻まれている。その隣には、錨にプレートが付けられ、プレートには‘PRESENTED TO MAYOR ICHIZO TSUJI and THE CITIZENS OF SASEBO’（辻一三佐世保市長と市民に贈る）とあるモニュメント（1977年）が並ぶ。それぞれのモニュメントの性格は明瞭で、佐世保市にとって特に問題視されるようなものではないように思える。しかし、これらのモニュメントについては日本語の解説板などはなく、また園内の案内図にも示されていない。完全に無視された格好になっている。

上記の米軍モニュメント群のすぐ脇は、鎮守府司令長官官舎跡である⁷⁾。「日本遺産」の「鎮守府 横須賀・呉・佐世保・舞鶴～日本近代化の躍動を体感できるまち～」（2016年認定）の構成文化財であり、詳細な解説板が2023年に設置された。解説板はあるものの何も目立つものに残らない長官官舎跡と、現地に何の表示もないままに建つ米軍モニュメント群との落差を

感じないわけにはいかない。他にも、近接する総合医療センター前に「旧海軍下士官兵集会所跡」の立派なモニュメント（1990年、図2⑤）がある。ここでも、2023年に「日本遺産」の詳細な解説板が付けられるまで、旧海軍下士官兵集会所の建物が米軍時代には陸軍基地司令部として用いられていたことは現地には示されていないかった。

佐世保海軍地区の場合、地区の大半が接收前は日本海軍の施設であり、返還地も元をたどれば日本海軍の跡地であることがほとんどである。旧凱旋記念館（現、佐世保市民文化ホール、図2③）のように、日本海軍時代の建築物が米軍時代を経て残る場合、日本海軍時代に関する説明が中心になることは自然であるかもしれない。しかし、ここでみたように、そうではない部分も含め、日本海軍のみが記念・顕彰され、米軍にまつわる来歴がみえなくなっているといえる。佐世保海軍地区の返還地現地で基地跡地という過去に触れるのは、上述した旧海軍下士官兵集会所、旧凱旋記念館の現地解説板のみである。

佐世保海軍地区周辺ではもう一つ、過去の米軍を隠そうとする動きを指摘できる。終戦までの「海軍橋通り」は、戦後には佐世保橋（海軍橋）以東が米兵向け歓楽街化し、「国際通り」とよばれるようになった（図2）。山本⁸⁾も説明しているように、国際通りの佐世保橋以西の区間は1979～89年にシンボリックな街路へと整備され、三つのパブリックアート作品が設置された。「世界平和への願望」を表現した⁹⁾「モニュメント『息吹』」、壁画レリーフ「世界をつなぐ海」（図2④、図4）、解説板で「佐世保市の姉妹・友好都市（港）」を説明する時計塔「国際都市佐世保『ハート時計』」である。通りの名を含め、これらは「国際」や「世界」をキーワードとしていることに注意したい。アメリカ色、米軍色が極めて濃いこの場所で、「国際」や「世界」は、アメリカや米軍基地を婉曲的に表現するものといえるだろう。すなわち、これらの作品はこの場所が有するアメリカ色、米軍色を弱める表現であり、過去の米軍をみえにくくさせていると考えられる。

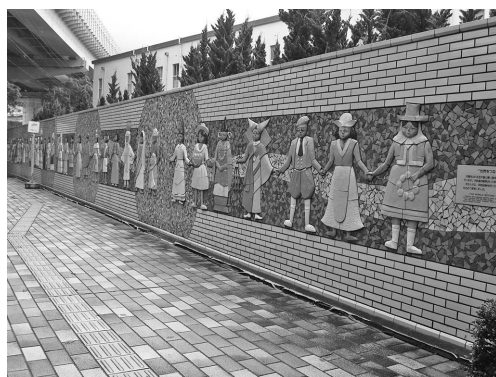


図4 壁画レリーフ「世界をつなぐ海」
図2④。2012年撮影。

また、佐世保川に架かる、佐世保公園とニミッツパークへの入り口であるアルバカーキ橋（図2）も同様に考えることができる。この橋の名は、佐世保市の姉妹都市の一つ、アメリカ合衆国ニューメキシコ州のアルバカーキ市に由来する。この命名は、佐世保公園・ニミッツパークに対して、米軍基地（跡地）ではなく、「日米親善の場」というアメリカがらみの別の意味を上書きするもの、あるいは、場所の意味づけを米軍基地（跡地）から日米親善の場へとずらすものと解釈できる。

いずれであれ、アルバカーキ橋はアメリカの都市名に由来する命名でありながら、意味的に、過去の米軍を隠す効果を有すると考えたい。

続いて、アメリカ海軍軍人の家族住宅地区（DH、ディペンデント・ハウジング）であった旧名切谷住宅地区（米軍の呼称は「ドラゴンガルチ住宅地区 Dragon Gulch Housing Area」）をみる。ここは戦時中に空襲を受けるまで一般の住宅地で、谷奥の一部は遊廓であった。市内中心部で平坦地を含むため、この地区の返還は佐世保市政にとって大きな課題であった。当初は中央を走る現在の名切通りも一般人は通行できなかったが、徐々に緩和され、1962年5月に市民会館（図2㉔）が返還地（下士官クラブ跡、さらに上述の遊廓跡でもある）に開館後は、「米軍はほとんど許可についての厳しい姿勢をとらな」くなり^{10）}、通行は黙認されていたようである。市営バスも運行され、地区内にバス停もあった。ただし、1964年2月、アメリカ海軍原子力潜水艦シードラゴンの寄港反対デモに当たって、デモ隊の通行が基地当局から許可されず、返還運動が強まったとされる^{11）}。この地区は上述した市民会館のほか、市立花園中学校や防衛庁宿舍などの用地として1950年代から縁辺部が返還されていたが、最終的には1969年4月に全面返還が成った。

最終返還部分（図2、図5）は、一部に一般の住宅地や商業地となった部分があるほかは、現在、佐世保中央公園や、市立中央図書館、県立武道館などの公共施設用地となっている部分が多い。米軍時代の建物はすべて取り壊され、中央の名切通り沿いの石垣も多くは積み直されている。とはいえ、米軍時代の石垣も所々に残り、地区外から地区へと通じる道路が地区に入ったところで急に道幅が太くなるように、米軍住宅地の痕跡は端々にみいだされる。ただし、公園内にかつてここが米軍住宅地区であったことを明示する解説板などは皆無である。

なお、公園内の県立武道館前には、佐世保市の「明治100年記念」モニュメントである、「太陽の娘」像がある（図2㉕）。この像は

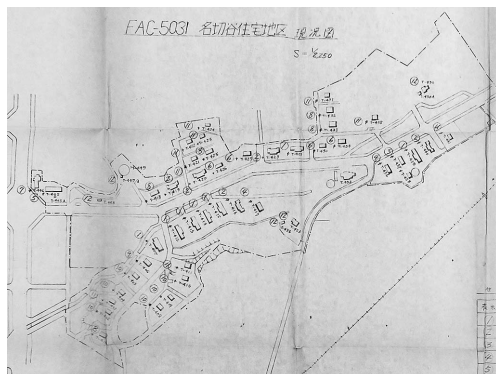


図5 名切谷住宅地区現況図（部分）
最終返還部分。佐世保市『名切谷米軍住宅地区の移転及び跡地転用計画書』佐世保市、1964（佐世保市立中央図書館所蔵）。

「太陽の娘」像がある（図2㉕）。この像は1968年10月に佐世保橋の東詰に建てられたが、「基地女性が星条旗を仰いでいるよう」だとして不評であり^{12）}、佐世保川の改修を機に現在地に移された^{13）}。このような経緯をみれば、かつて米軍に結び付けて理解されたという意味で、この像も広義の米軍に関わる景観であるといえよう。むろん、この像についても移転の経緯などを記す解説板はない。

最後に、返還された基地跡地そのものではない、基地周辺部における過去の米軍に関わる景観をみたい。何が基地跡地以外で米軍由



図6 旧米軍ハウス群 (1)

佐世保市山手町。右手2棟はマントルピース状のものがついている。2024年撮影。



図7 旧米軍ハウス群 (2)

佐世保市山手町。2024年撮影。

来といえるかは難しいが、例えば1950年代の米兵向け売春宿である「ハウス」(席貸)群¹⁴⁾はほぼ跡形もなく、米兵向けの「外人バー」は縮小しつつも「外国人バー」として現役の景観というべきであろう。ここでは過去に米軍が関わって形成された今に残る景観として、米軍ハウス群を取り上げたい。米軍ハウスとは、米軍当局が建設・管理したものではなく、民間の貸家で主にアメリカ軍人向けに建設されたものを指す¹⁵⁾。

佐世保にかつて米軍ハウスがどれだけあったかは不明だが、1970年代の米海軍基地の縮小前の時点で、「約600戸」、「430戸」という数字が新聞記事に表れている¹⁶⁾。その後50年が過ぎたが、現在でもかなりの数が一般住宅として主に市街山手に分散して残っており、目にすることは難しくない。図6・図7は名切谷住宅地区からほど近い、旧米軍ハウスが数戸単位で集中する一画である。ともに特徴的な平屋がまともに残っており、おもしろい事例であるといえる。ただし、佐世保の旧米軍ハウスが文献や記事などで取り上げられること自体がまれで、何らかの解説板などで現地に明示されている例は管見の限りない。

Ⅲ 忌避される米軍に関わる景観

ここまで明らかにしたように、佐世保において、過去の米軍に関わる景観はほとんど顧みられていない。米軍が設置した佐世保公園のモニュメントは無視され、基地跡地を示す解説板もほばない。以下では、このように米軍にまつわる来歴が扱われる要因について考えていきたい。

まず確認しておくべきは、米軍にまつわる来歴がただ忘却されているのではないということである。現在の米軍基地の存在や過去の基地文化はもちろんよく知られ、過去の日本海軍は「日本遺産」指定にもみられるように強調される。意図的、選択的に、米軍に関わる過去が軽

視されているのであり、過去の米軍に関わる景観が忌避されているといわざるを得ない。佐世保において、米軍は地域資源として重要であるように思われるが、それとは裏腹に、米軍にまつわる来歴は負の記憶、より正確には、後述するように不名誉・恥辱の記憶であると解釈できる。いいかえれば、米軍基地跡地などは負の場所、不名誉・恥辱の場所として、位置づけられていると考えられる¹⁷⁾。

こうした米軍基地跡地の忌避は、「エンブラ闘争」、すなわち佐世保におけるエンタープライズ寄港阻止闘争の、現地における表示の欠如と重なり合うものである。エンブラ闘争は、1968年1月に、米海軍原子力空母エンタープライズの佐世保基地への寄港を実力で阻止するために集結した学生を中心とするデモ隊が、機動隊と衝突した事件である。主にその舞台となったのは、佐世保川に架かる佐世保橋と平瀬橋（図2）の付近であった。70名以上の逮捕者を出し、また70年安保闘争につながる大きな事件であるが、現地には何の解説板もない¹⁸⁾。米軍基地跡地が現地で表象されない以上、エンブラ闘争を現地で表象できないのは当然であろう。

また、こうした負の記憶をまとう過去の米軍に関わる景観については、他の表象、あるいはスターケン¹⁹⁾が論じるところの他の記憶を覆い隠す「隠蔽記憶 screen memory」によって上書きされていることが指摘できる。前章でみた国際通りのパブリックアートの「世界平和」や、アルバカーキ橋の「日米親善」、また日本海軍の強調がそれに該当する。佐世保の来歴を語る「物語」は日本海軍を軸とし、米海軍は良くて脇役にすぎない。「日本遺産」認定はその構図を強めたといえよう。

こうした表象戦略の一環にレトリックの作用を指摘することも可能である。レトリック、すなわちメタファー、メトニミー、シネクドキは、単なる文彩ではなく、意味拡張のしくみであり²⁰⁾、その視点からは、米軍基地や基地跡地が意味的、比喩的にどのように拡張して、すなわちずらして表象されているかとらえることが可能になる。上でみた例であるが、米軍基地（跡地）に対する「世界」や「国際」という表象は、婉曲的というだけではなく、意味的な上位概念へとずらすもので、シネクドキである。また、佐世保に限らず、基地の町における基地文化への注目は、米軍基地（跡地）から、「ハンバーガー」、「ジャズ」、「アメリカ文化」などという空間内で近接する事象への意味的横ずれであり、メトニミーである。メタファーはみいだせないものの、レトリックによる意味拡張が、過去の米軍に関する景観を不可視化させていることが観察できる。

なお、佐世保において米軍の過去が表象されにくいことには、死者の不在も影響している可能性がある。荻野²¹⁾は、日本の文化遺産は追憶の秩序にある、すなわち死者の存在が重要であると論じている。多数の死者の存在が認められず慰霊の対象にならない場合、追憶の秩序にのらず、遺産化されにくい。佐世保に限らず、大半の日本国内の米軍基地では、死者がいなわけではないであろうが、外部からはみえない存在である。こうした、慰霊の対象ではない負の

遺産には、他に佐世保の場合では戦前・戦中の砲台などが該当しようが、同様に表象の困難を抱えていると考えられる²²⁾。

このように、過去の米軍に関わる景観が佐世保において忌避されている要因を考察してきたが、これらは、行政に関わる、公的な場における記憶・顕彰の場面にはほぼ限定されていることが指摘できる。それ以外の例えば観光の場面では、米海軍基地に入場する観光ツアーが以前は定期的に催行されていた。あるいは、アメリカ文化を楽しむ「アメリカタウンフェスティバル」が2012年～2015年に中心商店街で開催されていたように²³⁾、商業的なアメリカ文化の利用は珍しくない²⁴⁾。2022年に開業したアメリカをモチーフとした商業施設、「佐世保アメリカンヴィレッジダイナー」は、その位置が赤崎貯油所（図1③）の一部返還地²⁵⁾であることから注目される。その他にも、旧米軍ハウスのリノベーションを売りにしている不動産会社があり²⁶⁾、旧名切谷住宅地区内に2021年に竣工した島瀬町自治会館は米軍住宅風のデザインになっている²⁷⁾。

これらみると、上で明らかにした、米軍モニュメントの無視や米軍基地跡地であることを示す解説板の不在といった、過去の米軍に関わる景観の忌避は、むしろ特殊というべきであろう。行政に関わる、公的な場における（狭義の）記憶・顕彰の場面においてのみ、それらは起こっている。

このように、佐世保における一般的な表象から、公的な場における記憶・顕彰を分けてみると、両者の相違が明瞭になる。まず、一般的な表象としては、米軍は（不十分とはいえ）地域資源である。米軍基地跡地は観光資源・地域資源としては弱いものの²⁸⁾、基地文化は過去まで含む以上、過去の米軍まで部分的には地域資源化している、しつつあるとはいえよう。

それに対して、公的な場における記憶・顕彰の対象は狭い。一般にあって、過去の米軍に関わる景観は負の記憶を伴う。ただし、通常の負の記憶の場合、戦争であれ災害、事件・事故であれ死者が存在し、慰霊の対象であるのに対し、米軍にまつわる来歴は（他国の支配を受けるという）不名誉・恥辱の記憶として忌避されるという違いがある。公的な場における記憶・顕彰はそれを強く反映している。むろん、郷土史類など文献では米軍にまつわる来歴が取り上げられているが、現地では表象されない。不名誉・恥辱の記憶の現地における生々しさ²⁹⁾が、表象を避けさせているのであろう。公的な場における記憶・顕彰としては、過去の米軍に関わる景観は未だ望まれていない。

このように、佐世保における過去の米軍に関わる景観をめぐり、一般の表象と公的な場における記憶・顕彰の間の一種の対立構造がみいだされる。それはこの問題の困難さを物語っていることはいうまでもない。米軍にまつわる来歴をどう位置づけ、過去の米軍に関わる景観をどうみせるか、佐世保においては未だ安定しておらず、今後に変化していくものと考えられる。

Ⅳ おわりに

本稿では、佐世保において、過去の米軍に関わる景観がほとんど顧みられていないことを明らかにした。米軍の建てたモニュメントは無視され、基地跡地には解説板もない。米軍にまつわる来歴は、負の記憶、より正確には不名誉・恥辱の記憶であるため、佐世保において忌避されている。ただしそれは公的な場においてのみ表れていることも明らかになった。

佐世保を含め、横須賀、舞鶴、呉は、日本の4軍港都市－海軍鎮守府が置かれたことのある都市－に数えられる。そのうち、現在でも米海軍の拠点であるのは佐世保と横須賀のみである。ただし、横須賀は一見すると佐世保とは大いに異なっている。佐世保と違い、中心市街地に直接米軍基地が面していること、市中心部の基地はほとんど返還されていないこと、基地文化がより目立つこと、初代基地司令官の像が港を見下ろす公園に立っていること。しかし、基地跡地がほとんど顧みらず、忌避されていることは、横須賀でも確認され、佐世保と共通しているのである。

米軍基地跡地の記憶の複雑さをどう解きほぐすか。負の記憶、そしてその景観と場所をどうとらえるか。さらに考えていきたい。

注

- 1) 岩永 滋「佐世保バーガー－新たな地域産業としての展開－」ながさき経済 235, 2009, 11-17 頁。
- 2) 「タコス文化復活を 5 人組、全国に PR 活動“元祖”主張しまちおこし」西日本新聞 2017 年 4 月 27 日。
- 3) 「4 年ぶり「させば JAZZ」復活 節目の 30 回、新たな歴史を グラミー賞小川さんら出演 27 日開催」長崎新聞 2023 年 8 月 24 日など。
- 4) 山本理佳「戦後佐世保市における「米軍」の景観－佐世保川周辺の変容－」（上杉和央編『軍港都市史研究Ⅱ景観編』清文堂、2012）327-363 頁。
- 5) 本稿では、解説板など現地における表象に考察を限定している。その理由としては、表象一般のなかで、現地での表象は特別な存在であると考えられること、郷土史類で米軍基地返還のような事象が全く記述されないことはあまりない（一方で現地では何の説明もないことはありうる）ことがあげられる。
- 6) 本稿では米軍基地をとらえるにあたって在日米軍縮小再編が決まった 1968 年を画期としている。同年 12 月の第 9 回日米安全保障協議委員会で、大幅な基地の整理・統合計画（通称ジョンソン・マケイン計画）が了承された。川名晋史『基地の消長 1968-1973－日本本土の米軍基地「撤退」政策－』勁草書房、2020, 38 頁。
- 7) 長官官舎は太平洋戦争中の空襲で焼失。隣接する副官官舎は戦後も残り、一時期は米海軍司令官住宅として使われていたが、返還後の 1993 年に、老朽化を理由に解体・撤去された。
- 8) 前掲 4)。
- 9) 作品の解説板による。
- 10) 中本昭夫『続佐世保港の戦後史』芸文堂、1985, 180-181 頁。
- 11) 「25 日に調印 佐世保名切道路も返還」毎日新聞 1969 年 4 月 21 日など。

- 12) 「悪評「太陽の娘」像 佐世保の明治百年事業」朝日新聞 1968 年 10 月 31 日。
- 13) 「「太陽の娘」像 芸術の森に移転へ 佐世保川の拡幅で受難もあったが…」朝日新聞 1983 年 1 月 12 日。
- 14) 吉田容子「敗戦後長崎県佐世保市の歓楽街形成史－遊興空間をめぐる各主体の関係性に着目して－」都市地理学 10, 2015, 61-77 頁。
- 15) 新井は「米軍によって規格化された平屋の一軒家で、全室が洋間であることと、平均 10 畳のリビングと庭があることを特徴とする」と米軍ハウスを定義しているが、必ずしもこれに当てはまらないものもあるようである。新井智一「東京都福生市における在日米軍横田基地をめぐる「場所の政治」」地学雑誌 114-5, 2005, 774 頁。
- 16) 次の同じ時期の 2 つの新聞記事に、それぞれ「米軍借家約六百戸」、「提供住宅四百三十戸」とある。対象の広い前者の方が実態に合った数値ではないか。「住宅難どこ吹く風 外人住宅ガラあき家主さんは借り手探し」長崎新聞 1970 年 6 月 23 日。「米軍引き揚げ あき家ぞくぞく 佐世保あわてる家主さん 医師や会社の寮へ懸命に誘致合戦」, 西日本新聞 1970 年 6 月 26 日。
- 17) このような選択的・意図的な「忘却」は、フットのいう「抹消」としての負の記憶の景観化に該当すると考えられる。拙稿「関東地方における米軍基地跡地の記憶と景観」九州地区国立大学教育系・文系研究論文集 7-2, 2021, No.2。フット, K. E. 著, 和田光弘ほか訳『記念碑の語るアメリカ－暴力と追悼の風景』名古屋大学出版会, 2002。
- 18) 佐世保橋たもとの旧橋親柱・高欄移設モニュメントに付属する「佐世保橋の歴史」と題された解説プレート(1986 年)には、「…戦前・戦後を通じて市民、また佐世保にゆかりのある人々の喜びと悲しみの歴史が刻みこまれている橋である」と、かなり婉曲的に記されている。なお、日本遺産をめぐるまちあるきツアー「海軍さんの散歩道」では、ガイドによるエンブラ闘争の説明があるとのことである。「ながさき旅ネット」https://www.nagasaki-tabinet.com/blog/tabibu/38_bu/202301 (2024 年 9 月 20 日検索)。
- 19) スターケン, M. 著, 岩崎 稔ほか訳『アメリカという記憶－ベトナム戦争, エイズ, 記念碑の表象』未来社, 2004, 16-27 頁。
- 20) レイコフ, G. 著, 池上嘉彦ほか訳『認知意味論』紀伊国屋書店, 1993。拙稿「比喩による場所の言語的構築」地理学評論 83-3, 2010, 270-287 頁。
- 21) 荻野昌弘「文化遺産への社会学的アプローチ」(荻野昌弘編『文化遺産の社会学－ルーヴル美術館から原爆ドームまで』新曜社, 2002) 29 頁。
- 22) 拙稿では長崎について論じた。拙稿「軍事都市としての長崎」(増崎英明編『今と昔の長崎に遊ぶ』九州大学出版会, 2021) 263-280 頁。
- 23) 1985 年から始まった「アメリカンフェスティバル」とは別である。
- 24) 佐世保市経済部による観光客誘致を目的とした「USA タウン」構想もあったが実現しなかった。「USA タウンをつくろう「アメリカ色」強調 佐世保市構想 観光との相乗効果狙う」長崎新聞 1996 年 3 月 30 日。
- 25) 米軍人・軍属向け住宅地(いわば「新米軍ハウス」群)とセットで開発されている。
- 26) 「佐世保不動産」<https://sasebo.biz/?news=flat-house-renovation2> (2024 年 9 月 20 日検索), <https://www.facebook.com/saseborealestate> (2024 年 9 月 20 日検索)。
- 27) 「外観は旧米軍住宅 新自治会館が完成 佐世保・島瀬町」西日本新聞 2021 年 4 月 5 日。
- 28) 上述したまちあるきツアー「海軍さんの散歩道」では国際通りにある佐世保バーガーの名店の解説で米軍基地に触れられるようである。前掲 18)。
- 29) 場所の「アウラ」あるいは「ゲニウス・ロキ」が論じられてきた。香川 檀『想起のかたち』水声社, 2012, 136 頁。